

一八八三年十二月十八日(火)

ドワキネーシヨル
南神村において、信者たちと親しむ聖ラーマクリシユナ

聖ラーマクリシユナは、このところほとんど三昧に入っておられる。ただ、ラカールほか信者を、どうしたら靈意識チャイニヤに目覚めさせることが出来るか、それだけに氣を遣つかっておられる。

朝早く、部屋の西ペランダにタクールは坐っていらっしゃる。今日はボウシユ月の四日、火曜日。オグロハヨン黒分四日目。キリスト曆一八八三年十二月十八日。デベンドラナート・(タゴール)タクルの信仰と離欲の話が出て、聖ラーマクリシユナは彼のことをほめていらっしゃる。ラカールたち青年信者の方を眺めながらおっしゃった——「あの方は立派な人物だ。けれども、はじめから世間に巻き込まれずに、子供のころからシユカデーヴァのように毎日神を想っていられる若いすぐれた離欲の人たちは、実に恵まれているんだよ！」

世間の人は必ず、何かしら欲をもっている。また一方では、信仰も見うけられる。シエジョさん(マトゥール氏)が訴訟事件にかかずらっていてね、大実母ママカーリーのそばでわたしにこう言うんだ——「パパ、どうかこのお供えものをマーに捧げて下さい」と。私はそれをそのまま、素直にお捧げしたよ——このわたしの手からお供えをすれば、訴訟に勝てると思しっていたんだね。

ロティの母さんは、たいそう信心深い人だったよ！ 頻繁にここに通ってきては、どんなにお世話してくれたことか——。ロティの母さんはヴィシユヌ派だ。しばらくたつてここへ来たとき、わたしが大実母カーリーのお下がりをお食べているのを見た——それっきりここへ来なくなつた！ 偏つた信仰なんだよ！ 人を見ても、初めのうちはなかなかかわからないね」（訳註——ヴィシユヌ派は聖クリシュナだけを信仰してカーリーを認めない）

聖ラーマクリシュナは部屋の東側の戸口のそばに坐つていらつしやる。寒い季節なので厚手の肩掛けを羽織つておられる。ふと太陽を眺めたかと思うと、そのまま三昧に入られた。まばたきも止めて！ 外界の意識もなく！

これが、ガーヤトリ・マントラの真髓なのだろうか？ ——タツ サヴィトール ヴアレーニヤン バルゴー デーヴァーシヤー (リク・ウニダ 3:62, 10) デイーマヒー(かの) サヴィトリ神の 崇敬されるべき 神の恩寵なる 聖なる光を 我ら瞑想す

しばらくして三昧は解けた。ラカール、ハズラー、校長たちがそばに坐っている。

聖ラーマクリシュナ(ハズラーに向かつて) 三昧や前三昧は愛によつて起こることは確かだ。あつちの地方(シヤームバザール)でいつか、ナタバル・ゴースワミーの家で讃神歌を催したことがあつた。そこで、聖クリシュナとゴビーたちの尊影を得て、三昧に入ってしまった！ わたしの象徴体(幽体)が聖クリシュナのすぐ後を歩いている感じだったよ！

ジヨラサンコ(地名、南神寺院の南8哩)のハリ集会で、そこと同じ讃神歌を聞いたときも、三昧に入つ

て意識がなくなつた。あの日は、すんでのことで肉体を捨てるどころだつた」
聖ラーマクリシュナは沐浴に行かれた。沐浴の後で、あのゴーピーの愛についての話を聞かせて下さつた。

「モニたちに向かつておつしやる——

「ゴーピーたちのあの情熱は容認めなけりや！　こういう歌をうたつて——

友よ！　まだ着かないの？

私の美しいシヤーマシヤーマスンダル(クリシュナ)がいる森に

私は疲れて　もう歩けない！

それから——

ああ、友よ　私は帰らないわよ！

クリシュナの名を唱えられない家なんか——」

ターンタニヤのシッデーシュワリー・カーリー寺院と聖ラーマクリシュナ

聖ラーマクリシュナはラカールのために、シッデーシュワリーに青ココナッツと砂糖を供える誓いをしておられた。モニにおっしゃる——「お前、青ココナッツと砂糖の代金を出してくれるかい？」

午後、聖ラーマクリシュナは、ラカールやモニたちとターンタニヤのシッデーシュワリー・カーリー寺院(寺院)に向けて馬車を走らせた。途中のシムリヤ市場で青ココナッツと砂糖を買った。

寺に入ると信者たちに、「青ココナッツを切つて砂糖を入れて大実母のところ(マ)に供えるように——」とおっしゃった。(訳註——青ココナッツの果汁に砂糖を入れて供える)

寺に着いたとき、その寺僧たちが友だちといっしょに、マアの御前(ゴゼン)でカルタあそびをしていた。タクールはそれをご覧になって、信者たちにおっしゃった——「見る、こういう場所でカルタあそびなどしている！　ここは神様を想うところなのに——」

こんどは、聖ラーマクリシュナは、ジャドウ・マリツクの家に行かれた。ジャドウと共に、大ぜいの旦那方が坐っていた。

ジャドウは、「ようこそ、ようこそ」とお迎えした。互いに近況や健康を尋ね終わつてから、聖ラー

(訳註)シッデーシュワリー・カーリー寺院——一八〇三年にジャンカル・ゴシユがカルカタ、ターンタニヤに建立した寺院で、カーリーバリとも言う。祀られているカーリー女神はシッデーシュワリーと呼ばれ、成功を与えてくれる女神の意味である。ジャンカル・ゴシユの曾孫(ひま)がスポドゥ・チャンドラ・ゴシユで、後のスワミ・スポダーナンダである。マヘンドラ・グプタの家は、ここから400メートルほど東にある。この寺院にはスワミ・ヴィヴェーカーナンダも何度か訪れている。

マクリシユナはお話しをはじめられた。

聖ラーマクリシユナ「(笑いながら) あんた、どうしてこんなに沢山、道化やお世辞使いをそばに置いておくんだい？」

ジャドウ「あつはつはつは、あなたに救っていたただくためにですよ」(一同笑う)

聖ラーマクリシユナ「お世辞使いどもは、金持ちが財布のひもをゆるめてくれるだろうと思つていゝ。だが、金持ちから金を出させることはたいそう難しいよ。一匹のジャツカルが牡牛お牛に出合つて後につきまとつていた。牡牛があちへ歩いていけば、せいづもいっしょにセカセカついていく。ジャツカルは思つているんだ——『あそこに擧丸がブラ下がつている。いまにきつと地面に落っこちるから、食べてやろう』とね。牡牛が横になつて眠ると、せいづも傍にゴロリところんで寝る。また起き上がつて歩き出すと、せいづも一生懸命ついていく。何日もこうして従したがつてまわつたが、擧丸はまだ落っこちない。せいづはとうとう諦めて行つてしまつたとさ(一同大笑い)。お世辞使いというのは、こうしたものだ。

ジャドウと彼のお母さんは、聖ラーマクリシユナと信者たちに飲みものを出してもてなした。